



巻 頭 言

科学技術への期待

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
東海支部長

片岡一男

太平洋戦争から60年を過ぎ、戦中・戦後の米不足の時代を知っている人は、人口の三割を切ってしまった。また、米が余りだした昭和40年以降のことしか知らない人が五割を超える時代を迎えた。

わが国の長い稲作史の中で、この間の技術革新は目覚しく、それを体験した人も次第に減ってきた。戦後、多くの人々が食糧増産を目指して稲作技術の革新に取り組んだ。先人の教えを受けるとともに、全国組織ネットで試験研究・普及を図り、産官学一体になって稲作技術の向上・発展に努めた。その結果、冷害・いもち病やメイ虫などの病虫害・雑草の害などの克服、更に農作業の機械化による省力化、品種改良による耐倒伏性・食味の向上など枚挙に暇の無いほどの技術革新が実現し、水稲作付面積は300万haを超え、生産力・生産性ともに向上した。そして、「コメ余り時代」を迎えることとなる。

この間にはさまざまな経過がある。特に農薬や除草剤の推移は、今後の農村・農業を展望していく為にも正確に語り継がねばならない(除草剤の推移については、「除草剤開発の思い出」などの記述があり、関係者は周知のことであるが)。種子消毒剤やイモチ病防除剤の水銀剤・メイ虫やウンカなどの害虫に対するDDTやBHC・ホリドールなどの出現は、病虫害防除技術発展の先駆者の役割を果たし、昭和20年代後半から始まった除草剤についても、24-Dの驚

異的な殺草力に続いて、ノビエにたいするPCPの出現はやがて「よつんばいの田の草取り」の重労働からの開放を可能にし、稲作の生産性を飛躍的に向上するきっかけとなった。

ここに掲げた多くの剤は、今日では禁止されている。しかし「コメ増産時代」にあっては、その効果は絶大であり、技術革新の旗手は農薬をはじめとする新資材の開発であり、これらが「もし無かりせば」稲作技術のこれほどまでの進歩発展は無かったといえる。とは言え、メダカやタニシ、またトンボやイナゴなどが田んぼから姿を消していったのに、これらの農薬が影響したことは否定できまい。しかし、近頃これらの生物が多くの水田でよみがえりつつある。これは、除草剤50年の変遷の中で、より環境にやさしく、効果の劣らないものの開発・普及に努めてきた成果であり、今後も続く努力目標であるといえる。

今後、人々がより高度な生活を営む為に各地で人工の手が加えられ、それに伴う環境の整備は、更に高度な科学技術に基づいた対策を加えることにより成り立っていく。これは、過去の歴史が物語り、今後も社会の成熟とともに同様な発展過程をたどるものだと思う。すなわち、環境の現状保全でなく新しい革新技術による新しい自然の創設とも言える。したがって、科学技術の一層の発展に期待するところ極めて大である。